

「心・脳」問題と現象学——生命へ

斎藤 慶典

はじめに

タイトルについてですが、実は東洋哲学研究所に最初にお伝えしたタイトルは『心・脳』問題と現象学——あるいは「生命」でした。それを、最後の部分を「生命へ」に変えました。変えたほうが、言わんとすることがよりはっきりするかと思っただからです。

タイトルの真ん中にある「現象学」というのは、哲学の上で私が専門とする学問分野です。20世紀初頭のヨーロッパ、ドイツで成立し、フッサールやハイデッガーといった哲学者のもとで展開され、戦後はフランス

で独自の発展を遂げました。

この現象学の核心にあるのは、非常に単純なことです。「現象する」——つまり、「何かは何かとして姿を現わす」ということです。これが実はこの世界の根本なのではないか。この世界の何をもつてきても、それが何らかの仕方ですら「現象する」事態を抜きにすると、すべて成り立たなくなってしまうのではないか。古来、哲学では『存在する』というのが世界の根本だ」と言ってきましたが、「存在する」ということですから、何らかの形で現象しないかぎりは、そう言えないのではないか。

そんな意味で、現象の根本性を中心にした学問・

哲学が現象学だと考えていただくと、その「現象する」ということをタイトルの真ん中に置いたときに、この連続講演会（テーマ「現代科学の焦点——生命・脳・心」）の3つの表題である「脳と心と生命」がつながって見えてくるのではないか——そう思って、こんな題をつけた次第です。

1 「心と脳」はどんな関係にあるか

さっそく本題に入りますが、まず問題の出発点は「心と脳の間には一体どんな関係があるのか」ということです。ここで私が言う「脳」は、脳がその中に位置づけられている身体も含めます。脳というのはいくら重要な器官とはいえ、それだけで孤立して存在しているわけではなく、身体の他のさまざまな器官、肺とか心臓、あるいは筋肉組織といったような器官と、何らかのかたちで関係をもちながら成立しているわけです。したがって、「心と脳」と言ったときの「脳」は身体も含めて考えていただきたいと思います。

そうすると、これは哲学ではすでに近代のデカルト

以降、さまざまな場面で問題になってきた「心身問題」にほかなりません。「心身問題」が、脳科学の著しい発展によって、身体の中での思考を司る中枢器官としての脳に議論が特化し、「脳と心の間」にどんな関係があるのか」と問われるようになったわけです。

しかし、これはある意味で問題を限定しすぎというか、矮小化につながっているおそれがあります。実は、脳だけが思考するものではありません。「思考する」には、脳が決定的な役割を演じるにしても、先ほど言いましたように脳は孤立して存在しているわけではなく、さまざまな他の身体器官とのつながりの中でようやく成立します。それから、さまざまな身体の器官も実はそれらだけで存在しているわけではなく、たとえば肺は呼吸をするという仕方以外——身体の外部にあるさまざまな物質、酸素や二酸化炭素といったものと接しているし、眼は光と関わる等々といった具合です。それから、われわれはご飯を食べなければ生きていきませんので、さまざまな栄養素を摂取し、不要なものは排泄するというかたちで、身体の外ともつながっては

じて身体は成立するわけです。こうした大きなネットワークの中で改めて「心」というものを考えてみる必要があります。

「因果関係」が成り立つか

さて、「心と脳の間になんらかの関係があるのか」という問いに対して、まずだれもが思いつく代表的な答えがふたつ挙げられます。ひとつは「因果関係」をそこに設定する考え方です。原因→結果の関係ですね。

現代において、心と脳の間因果関係を考える場合、「原因」とされるのは99%が「脳」という物質あるいはその物質の中で起こるさまざまな化学変化や電気的な状態の変化です。たとえば、電位差が生ずることで電気が流れるといったようなことです。そういう脳のレベルでの物理化学的なものが原因となつて、その結果、心のさまざまな働きが惹き起こされ、たとえば、いま目の前に私の姿が皆さんには見えているというわけです。そうすると、それは明らかに心によつてとらえられているわけですが、光が私の身体表面から反射して皆さんの網膜の中に飛び込み、網膜から視神経を通つ

て大脳にその刺激が信号となつて届く。そして、大脳の特定の部位の神経が興奮する。つまり、そこに微弱的な電流が流れることで、いま皆さんには私の姿が見える。こういう考え方です。これは、「脳が原因で、心はその結果である」というとらえ方を強く示唆するわけですね。

もちろん、その逆でもいいわけです。原因と結果を逆にして、心が原因で、その結果、脳に電気的な変化が起こると考えてもいいはずですね。このケースは、後で思考実験をすることで皆さんにも考えていただきたいと思ひます。

「動機づけ関係」で説明できるか

もうひとつは「動機づけ関係」です。

たとえば、皆さんに「いま、どうしてそこに座っているのですか」と聞いたなら、「きょうの講演会のテーマに興味があったから」などと、お答えになると思ひます。これは、いまそこにいることの「理由」を聞いているわけです。原因とは違うわけです。原因を聞かれた場合には、「いま、どうしてそこに座っているの?」という

問いに対しては、「何時何分に家を出て、足の筋肉繊維を何ミリ持ち上げ、それを何千回か何万回か繰り返して、ここへ来た」と答えなければなりません。これは、物理的な意味の原因・結果の連鎖でもって、自分がいまここにいることを説明しているわけです。

普通、「いま、何であなたはそこにいるのですか」と問われたときに、物理的因果関係で答える人はいません。それとは違う仕方では答えているわけで、哲学でいう「動機づけの関係」によって答えている。つまり、われわれがある行為をするときには何らかの「理由」や「目的」があるはずで、講演を聴きに来るという場合は、理由と目的はほぼ重なります。「何でそこにいるのですか」「きょうの講演が面白そうだから来ました」。つまり、講演を聴くのが目的で来たというわけです。このように、理由や目的という観点から答えるわけです。

因果関係が最も有効に機能し、だれをも納得させてきたのはいままでもなく自然科学の分野で、それも物理学の分野がそのチャンピオンです。これは、要するに物質のレベルでものごとの原因・結果を調べてみる

と、きわめてよくそれが理解できるからです。「これが原因で、それがこのようにして、こういう結果を惹き起こしたのだな」ということがきれいに説明できます。たとえば、いま私が時計を持っていて、パッと手を放せば、下へ落ちます。「どうして落ちるのでしょうか」と聞かれれば、「地球の中心に向かって重力という力が働いていて、それが原因で、その力に引張られて時計は下に落ちるのだ」「ああ、よくわかりました」ということになるわけです。つまり、「因果関係」は、物理的なもの間で起こる出来事の相互関係を説明するにはきわめて強力かつ有効なカテゴリーであることがわかります。

もうひとつの「動機づけ」のほうを考えてみましょう。「何でそこに座っていらしゃいますか」と問われたときに、「講演を聴くために座っている」と、目的や理由で答える考え方。これは、原因・結果ではありません。つまり、物理的次元ではなくて心の次元で起こるさまざまな事態、あるいは事態の間の関係を説明するときには、原因をもち出すのではなくて、理由や目的をも

ち出すことで、よく理解できるわけです。

そこで問題は、心的次元や物理的次元に話を限ればそれですむけれども、「心・脳問題」はこのふたつの次元にまたがっているという点にあります。脳は物理化学的な次元に属するものであり、心はそうではありません。まったく存在の仕方が違うふたつの領域、心と脳という領域の間はどういう関係があるのが問題になっているわけです。いままでは、物理的次元では因果関係がよさそうだが、心的次元では目的・理由関係みないなものがよさそうだ、ということでは話がついていたわけです。そのふたつの領域をまたいだときに、どちらが有効かという点と、どちらも具合が悪そうです。「帯に短し、タスキに長し」という感じで、一見うまくいきそうに見えるけれども、何かおかしいということになるわけです。

「身体↓心」の病 / 「心↓身体」の病

もうひとつ例を挙げます。「外因性精神病」と「心因性精神病」とがありますね。精神病というと何だか大げさですが、心疾患、心の病氣、あるいは特定の心の状態

ぐらいでもいいでしょう。そういう心の状態がどうして起こったのかを調べてみると、ひとつの有力な候補が「外因性」と呼ばれるもので、器質性とか中毒性とかに分けられます。

器質性というのは、脳なら脳という特定の器官が普通とは違う状態になったために、心の状態も普通とは違う状態になってしまったのだ、という考え方です。たとえば、交通事故で脳のある部分を損傷した人がいたとする。事故の後、明らかに人格が変わってしまった。何か、違う人になってしまったみたいだというようなことがあります。そうすると、これは交通事故による脳の損傷がその人の心のあり方を変えてしまったと言えそうですから、これは外因性の典型的な例になるわけです。これは別に精神病ではないわけですが、心の状態や性格が変わったという意味では、物理的なものが心的なものに影響を及ぼしたケースと考えられます。

中毒性は、麻薬みたいなものがあって、たとえばマリファナをやると幻覚が起こって何だかいい気持ちになるというわけです。そのときのいい気持ちというの

は、普通経験するものとはよほど違うらしい。私はやったことがないから知りませんが、明らかに薬を飲むことで脳内に何らかの変化が起きて、いつもと違う精神状態を惹き起こすわけですから、これも物質レベルの変化が心のレベルの変化を惹き起こしたように見えます。だから、これは「因果関係」で何か説明がつきそうにみえるケースです。脳における物理的な因果関係が、領域をまたいで、心という物理的でないものにまで及んだのだと言えそうなケースですね。

ところが、まったく逆のケースが知られていて、それが「心因性の精神病」です。何か器質的なレベルで、つまり脳という特定の器官とか、そのレベルで大きな異変が見られるわけでは全然ないのに、患者といわれる人は心のレベルでの異変に苦しんで、お医者さんに行ったりする。たとえば、対人関係がうまくいかないとか、仕事がうまくいかないとかいうかたちでストレスを抱えている。ストレスというのは、まさに心因性の典型です。心のレベルで何かの圧力を感じて、それが身体的な症状を惹き起こすわけです。

単に気分がすぐれないだけではなくて、チツクのように顔面の神経が緊張し、痙攣けいれんしてしまうとか、あるいは反復脅迫といって何かをやらないと次に進めない。たとえば、神経症で典型的なのは、何度も「家の鍵を閉めたかな」ということが気になってしまう。ちょっと歩くと、何か閉めていないような気がして、また戻って来て閉め直すというようなことを、一回や二回ではなくて何十回ときには百回近くもやらないと、一步も外へ行けない。こうなると日常生活に大きな支障をきたすので、「おかしい」ということでお医者さんに駆け込むわけです。あるいは、就寝儀礼といって、寝る前に枕の位置がここでなければだめ、一センチずれてもだめというので、何度も枕を置き直す。これをやっていたら、いつまでたっても寝られないわけで、不眠になってお医者さんに駆け込む。

これらは、脳のどこがおかしいということではなくて、あえて原因を探せば、いま言った心的なもの、たとえば対人関係の問題であるとか、仕事に行き詰まっているといったものぐらいしか思い浮かばない。そ

うすると、これは心的な領域ですから、いま「原因」という言葉を使いましたが、正確に言うとは何らかの「理由」や「目的」に関わるレベルで何か齟齬そごが生じて、それがさまざまな身体行為、しかも日常生活に支障をきたすような身体行為となつて出現するわけです。

そうすると、心の疾患の場合も、「脳から心に作用が及んだ」ように見える場合と、「心のほうから身体に作用が及んだ」ように見える場合の両方がある、一体どちらなのだろうか。あるいは、その両方を認めればそれでいいのかというと、どうもスッキリしないわけです。

実験——「決心」と「脳の変化」の先後

そこで、思考実験をすることでこの問題に決着をつけようと考えた人たちがいます。

かつては思考実験として、それこそ頭の中での話でしたが、脳科学の進展によって実際にできるようなになった実験があります。たとえば、トランプのカードでも花札のカードでも何でもいいですが、目の前に何枚かバーツと並んでいるとします。どのカードを選ぶか

はご自由です。ともかく好きなカードを選んでくださいと言われたとします。その人に求められるのは、「どれを選ぶかを決めたら、決めた時点がいつだったかを報告してください」ということだけです。そうすると、ご本人は目の前のカードをあれこれと眺めて、「うーん、どれにしようかな」。何回かやらされるとすれば、「さつきは右から2番目を取ったから、今度は左から2番目にしてやろうか」とか、「相手の裏をかいて、もう1回同じ場所を取ってやろうか」とか、何やらあれこれと考えながら、「えいやっ」と決めて、「はい」とやるわけです。

そのときの時刻、つまり自分が心の中で「よし、次はこれにした」と決めた時点が正確に計れるとしたらどうでしょう。そのとき被験者の頭に電極をつけておいて、脳の中の物理的な変化をモニターできるようにしておきます。自分でモニターしてもいいし、横で実験する人がモニターしてもどちらでもかまいません。

実験では、一方で、本人が心のレベルで「よし、決めた」という時刻を計ります。他方、その「決めた」という状

態を表すと思われる特定の脳波なり電流が流れたのを検出して、その時刻を計るわけです。このふたつを比べて、どちらかがどちらかに先行していれば「早いほう（先行しているほう）が原因だ」ということができそうです。物理的な次元で「原因→結果」関係が成立するという事は、常識的に考えて原因が結果に先行していなければならぬはずですから。どんなにわずかでも先行していなければならぬわけで、そこに有意な時間差を読みとることができれば、どちらかが原因で、どちらかは結果だと言ってよいというわけです。

これは本当にゼロ・コンマ何秒を争う実験ですが、いまは非常に精密に測れるようになりました。誤差を調整するにしても、大脳で特定の電流が流れたときと、それがモニターの機械に到達するまでの本当にわずかな時間を微調整してやれば、ほぼ正確な時刻が割り出せる。

問題は、人が心のレベルでどのカードを選ぶか決めた時刻を一体どうやって計るかですが、比較的最近、ベンジャミン・リベット(Benjamin Libet)という人がMind

Timeという本を出しました。(邦訳「マインド・タイム脳と意識の時間」岩波書店、2005)

アメリカでの発刊は2004年ですから、実験はその少し前のことになります。詳細は省きますが、色で分けられた円盤があつて、ゆっくりと回転しています。針の前を円盤がグルグル回っているわけです。それを見ている人が「決めた」ときに、針の前を何色が通過したか。その色覚えていれば、ゼロ・コンマ何秒の単位で、心で決めた時間がほぼ測定できるわけです。そういう装置を、リベットは考案したわけです。

さて、その結果をお伝えする前に、皆さんに考えていただきたいのですが、先ほどのケースです。皆さんの目の前にカードを並べられて、「どれにしようかな」と考え、「よし、今回はこれ」「次はこれ」と決めたとします。決めたとき、モニター画面に、決めたことを示す特定の脳波の形が表われたとします。そのときに、問題はこうなるわけです。「私がいま右から2番目に決めたから、右から2番目を表わす脳波が現われたのか。それとも、右から2番目を表わす脳波が現われたから、

私がそう決めたのか。一体どちらなのか」。さあ、どう答えますか。

まったくランダムに、自由に選べと言われているわけです。そうすると、どれを選ぶかは本人ですら、あらかじめは知らないわけですね。その場で、思いつきで「えいや！」と決めてしまうわけです。であるなら、次のように言ってもよいように思われます。「明らかに、その場ででたらめに自分が決めたのだから、自分が決めたことで特定の脳波がそこに現われたのだ」と。もし、このとらえかたを認めるとすると、心が先行していることとなります。心が、大脳レベルにおける特定の脳波を惹き起こしたということになるわけです。原因「結果」というカテゴリーでいえば、心が原因で脳は結果だということになります。

ところが、他方で「いや、ちょっと待てよ。脳波すべてが決まるというのものもつともだから、自分で決めたと思っただけでも、実はそれに先行して脳波が現われていて、その脳波によって自分は決めたのだ。だから、原因は脳波のほうにある。脳の側にある」という考え方

もありえます。

先ほどの実験はそれに決着をつけようということですが、考察されたわけですが、むしろ一番ありそうなのは「両方が同時に現われている」という事態ではないでしょうか。同時だと、決着はつきません。「どちらが原因なのか、結果なのか」という問題には決着がつかない。しかし、決着がつかないとすると、それはそれで非常に重要な方向を示唆します。なぜなら、決着がつかないということは、「脳と心の間には原因「結果関係は成立していない。だから、因果関係でこの関係を考えたらだめだ」という方向を示すからです。つまり、「同時だ」という結果が出て、大変に貴重なデータになるけれども、そもそも問題は、同時性か・先行性をめぐって何か決定的な結論をこの実験から引き出すことができるのかということなのです。

脳の起動のほうが早かった？

『マインド・タイム』の原著が2004年にアメリカで出たとき、ある種のセンセーションを巻き起こしました。それは、著者のリベットが「心「脳問題に決着を

つけた」、あるいは「決着をつける実験結果を得た」と報告したからです。どういう結果だったかというところ、「よし、このカードを取る」という自発的行為が行なわれるおよそ0・55秒前に、すでに大脳の中で「準備電位」が起動していた事実を突きとめたのです。実際に手を出してカードを取る0・55秒前には、もう脳のレベルでその動きが始まっていたわけです。

もうひとつ重要な事実が付け加えられていて、たとえば本人が「今回は右から2番目に決めた」と意識した時刻を測定してみると、実際の自発的行為が行なわれる0・15秒前から0・20秒前だった。そうすると、脳のほうは実際の行為が行なわれる0・55秒前にはもう動き出しているのに、本人が「決めた」と意識するのは脳の起動よりずっと遅れて、実際の行為が行なわれる0・15秒前である。ということは、引き算をすると0・55秒マイナス0・15秒イコール0・4秒です。つまり、この0・4秒間は、本人が意識していないのに、脳から指令が発信され、行為に向けて体が動き始めているということを示している。ご本人が

「何々しよう」と思うのに0・4秒先立って、自発的な行為が、いわば無意識のうちに始まっているということになる。リベットはこのようにまとめます。

本人が「決めた！」と意識するより早く、脳がそれを先取りして動いてしまっているわけですから、本人の決断は、行為を起こす真の原因ではなくて、心が原因なのか脳が原因なのかという問題で言えば、明らかに脳のほうが原因であり、心はそれを後から追いかけているにすぎないと読めるわけです。

そして、脳のほうが先行して起動しているわけですから、リベットは「自由意志が否定された」と言います。つまり、われわれが自分で自由に選んだと思うことは、実は自由に選んだのではなくて、脳が勝手に決めてしまっているというふうに解釈するわけです。リベットの議論はこれで終っていなくて、人間の自由を擁護するためにさらに別の議論を付け加えますが、詳細は省きます。リベットの議論についての私の批判的検討は、『思想』という岩波書店から出ている雑誌(2010年3月号)に載せた「『心・脳』問題と現象学」という論文——き

よこのタイトルとメインの部分は同じです——そこでくわしく展開しておきましたので、興味がある方は、そちらをごらんください。

きようはそこでの議論とは別の方向から、言わばかた搦め手の方向から、リベットの議論に対する批判をしておこうと思います。そのために、フロイトと木村敏さんを、引き合いに出そうと思います。

「意識する以前」の領域は、心にもある

つまり、リベットは「本人がこれに決めた」と意識するのに先立ってその行為が始まってしまっているのだから、それは人間の心から何かを決める権利、つまり自由意志を剥奪はくたつするに足る証拠だ」と主張したけれども、そうはならないでしょうという批判です。

というのは、心のレベル——脳のレベルではなく——でも、「本人が意識しない」で何事かが「無意識に行なわれている」という例は、いくらでも引き合いに出すことができるからです。つまり「無意識過程」ということであれば、何もこの0・4秒間、脳が先行している、ということだけではなくて、心のレベルでもいくらで

も発見されているわけです。そして、それがひとつの理論を形成したりもしています。そのひとつの典型が、フロイトの精神分析です。

「ご存じのように、「前意識」とか「無意識」ということを言い出したのがフロイトで、たとえば「トラウマ」と呼ばれる外傷体験ですね。何かとてもいやなこと、とても受け入れられないようなことが起こったときに、われわれはそれを受け入れることを拒否することがあります。ところが、そのいやな事件が過ぎ去っても、われわれは記憶というものをもっていますから、たびたび記憶がそこへ向かわざるをえないことがある。あるいは、似たような状況に遭うとすぐにまたそれを思い出してしまうということがあります。

そのときにわれわれの心はどういう動きをするかという、そういう絶対に受け入れられないもの、受け入れることを拒否せざるをえないような外傷体験を、いわば回避して、そこに意識が向かわないようにするのは、思ひ出させない。これをフロイトは「検閲行為」と言っていますが、心の「意識の領域」に入る手前に一

種の門があつて、その領域に入ってくる前に、閉め出してしまふ。心には、明確に意識される以前のレベルがあり、意識のレベルとの間には敷居があつて、擬人的にいえば、そこに門番がいるわけです。そして、入ってきていいものと入ってきてはいけないものを選別している。トラウマのように本人が受け入れがたいものは入ってくることを拒否されて、自覚されないようにする。こういう心的なメカニズムがあるのだというわけです。こうしたメカニズムを、フロイトは「抑圧」と呼びます。抑えつけて、心の自覚領域に入ってくることを回避するわけです。

そしてどうするかというと、いわば気をそらすために、他の方向に心のエネルギーを向け変えるわけです。さつき神経症の例を出しましたが、たとえばドアの鍵を何度もカチャカチャやるとか、寝る前に枕の位置を何度も確認しなければだめだというのは典型的なノイローゼの症状ですが、そういうことに心的エネルギーを費やすことで、入ってくることを拒絶している当のトラウマなどを意識しなすむわけです。意識しな

いすむという意味ではいいのですが、何度も鍵を確認していたら一向に外出できなくなってしまうし、枕が気になって夜も眠れなくなってしまう。別の意味で日常生活に支障をきたし、お医者さんに駆け込まざるをえなくなるわけです。

要するに、「無意識の領域」というのが心の次元でも立派にあることのひとつの例をフロイトの精神分析は示したわけです。つまり、われわれの心の中で意識される領域はごく一部分で、そうではない意識下の領域で、さまざまなダイナミズムが、さまざまな理由や原因に当たるものがせめぎ合っていて、その中のいくつかが、われわれの自覚を構成するようなかたちで入場を許されるといふメカニズムです。

実際、われわれの心が意識しないでいろいろなことをやっているというのは、日常を振り返ってみればいくらでもあります。たとえば、酔っ払ってしまった、もうどこを歩いているのかもよくわからないけれども、翌朝ハッと目覚めたら、きちんと自分の家の玄関で寝ていたということがありますね。本人は意識していな

いけれども、足が勝手に動いて、いつもの道ですから、きちんと帰ってくれているわけです。これだって、無意識とまでは言わないけれども立派な前意識でしょう。いちいち意識しなくてもやっていることはたくさんある。たとえば、いま皆さん呼吸していますが、意識して呼吸をしている人はほとんどいないですね。喘息ぜんそくにでもならないかぎり、そんなことをしなくてもすむわけです。むしろ、人間の行動の大半を無意識にうまくコントロールするのも、心の大事な機能です。その上で、決断を要することだけを意識の明るい部分に引き上げて、じっくり考える。自分の人生に関わるようなことを、ですね。こういうメカニズムがある。

ですから、リベット批判に戻れば、脳のレベルである過程が無意識に進行しているからといって、物理的なものが心的なものを動かす原因になっているとは必ずしも言えないということです。同じ無意識のレベルで、時間的にも先行して、検閲が働き、抑圧機能が作動しているということは、いくらでもありうるわけですから。

自覚以前の心——統合失調症・うつの場合

もうひとつ別の観点からお話します。木村敏先生といえは、精神病理学者として世界的に高名ですが、木村さんの有名な議論に「アンテ・フェストウム (ante festum)」「ポスト・フェストウム (post festum)」というものがあります。

統合失調症、この病気の場合、健常者と言われる人に比べると、時間意識に顕著な違いがあるというのです。それは何かというと、人に出し抜かれまいようにするために、常に人の先へ先へと先回りしていかないといけないと思ひこむのだそうです。そのために絶えず緊張して、いわば意識が出ずっぱりになる。「次は、この人はこうするかもしれないから、先手を打って、こうやっておかなければ」というかたちで、いつも意識が出ずっぱりで、しかも先へ先へと先走りますから、そのことでエネルギーを使い果たして消耗してしまう。ある患者の表現によると、時間の流れが速すぎて、それに追いつき、それに先駆けようとすることに疲れ果ててしまつて、「時間の速い流れに自分が飲み込まれて

しまったかのようだ」というのです。これを木村さんは、「アンテ・フェストウム」と表現しています。

「アンテ」というのは「先」、「フェストウム」というのは「お祭り」で、「お祭りに先駆けて」と表現しています。何でお祭りかというのと、うつ病のほうは「ポスト・フェストウム」というのですが、「ポスト」は「後」という意味ですから、「祭りの後」です。祭りの後というのは、特有の精神状態にわれわれはなりませんね。お祭りで高揚した後は、何か腑抜けになってしまったような、急に寂しくなったような、フニャツとした、何か安定しない心の状態になります。この「祭りの後」が特有な精神状態を惹き起こすことは昔から知られていたもので、「ポスト・フェストウム」というラテン語はよく使われていました。これが、うつ病の患者さんの時間意識の構造に、きわめてぴったりの用語だということです。

統合失調症のほうは相手に出し抜かれないように、その先へその先へと一生懸命先回りしようとするので、疲れ果てて自分の足もとがおぼつかなくなってしまう。これと反対に、「ポスト・フェストウム」の場合は、未

来というのがこわい。新しいことが起こるということは、そこに得体の知れない、自分がこれまで出あつたことのない異他的なものが、どこからどう入り込んでくるかわからない。だから、とてもこわい。したがって、安心して生きていけるためには、すでによくわかつているもの、知っているもの、勝手知ったところにおいて、未知のものとか、得体の知れない異他的なものが入ってくるのを極力防ごうとするわけです。これを時間意識の構造として見ると、後ろ向きになるわけで、過去を向いた生き方になる。知ったものから一歩も出ようとしない。新しいものが来ようとする、後ろを向いて、入ってこさせないような感じですが。これが、「ポスト・フェストウム」です。

そのとき、その人の精神的な状態、気分はどうなのかというと、統合失調症の逆ですから、時間の流れが、きわめて遅い。あるいは後ろ向きである。あるいは、よどんで流れない。つまり、いつも過去に固着して、過去を墨守しているから、新しいものは何も入ってこないわけです。「古い、すり切れたレコードがいつまで

も回っているみたいだ」という表現をした患者さんもいるそうです。時間の流れが、よどんで、前に進まないわけで、へたをするとバックさえするわけです。

これらを何で引き合いに出したかというのと、これらも「本人が自覚する以前」の心の態勢に関わっているからです。心のはらむ時間というか、時間の流れとか時間の向きとか、これが健常者と言われる人たちとは大きく衣替えしているというか、構造化のされ方が違う。そのために、そこで受け取られるさまざまな出来事のトーンも色合いも、だいぶ様子が違うというわけです。

様子が違うぐらいなら、われわれも日常の中で気分のアップダウンがありますから、「きょうはさわやかだ」とか「きょうは何となくブルーだ」というのはあるので、それだけならたいしたことはありませんが、先ほどの神経症と同じで、ある限度を越すと日常生活に支障をきたします。家から一歩も外へ出られない、会社に行けないということになってくると、やはり放っておけないわけです。

この例のように、本人の自覚とは別の次元で心の構

造化がすでになされているということがあります。これもリベットに対する反論になる。つまり、「無意識過程が先行している」ことが、そのまま「脳が原因で心が結果だ」という議論にはならないということです。

心脳問題における「カテゴリー・ミステイク」

そこで、改めて問題をもとに戻って眺めてみると、結局、心と脳の間には、どちらかが原因でどちらかが結果だというような、物理的なレベルではたしかに成り立つような「因果関係」を見ようとすること自体が、一種のカテゴリー・ミステイクではないか。つまり、あり方が全然違うものを同じひとつのカテゴリーで結びつけようとするから無理が生じるのではないかということ。一方、心と脳の間には「動機づけ関係」ですべて説明しようとした場合にも、やはり一種のカテゴリー・ミステイクが起こります。

心というのは大きさも形もないわけです。他方で、物理的なものは大きさもあれば形もあります。ですから、単純に言えば、大きさも形もないものが、形や大きさをもったものにどうして作用できるのかと考えた

とき、そもそも「作用」という発想自体が無理だろうというわけです。

こうしてみると、心身(脳)問題は、その発端になったといわれる17世紀フランスの哲学者デカルトのもとで姿を現したときと、状況が全然変わっていないということになります。

デカルトは「松果腺仮説」というものを立てました。松果腺とは何かというと、脳の真ん中あたり、脊髄とか延髄につながっているあたりに小さな器官があって、マツボックリみたいな格好なので松果腺(松果体)と呼ばれています。デカルトは「脳あるいは身体と心とは、脳の中の松果腺でつながっていて、松果腺を通過することで、心から身体に何か命令が下り、また身体のさまざまな変化が心へと伝達されるのだ」、こういうふうに考えたわけです。

しかし、これが問題の何の解決にもなっていないのは明らかです。つまり、松果腺というのはあくまで脳の一部で「物理的なもの」です。目に見えて、きちんと解剖すれば、どんな機能を果たしているのかもわかり

ます。それが一体どうなることによつて、「心」という目にも見えないし形も大きさもないものに作用を及ぼすのか、まったく説明されていないわけです。松果腺の中の物理的な変化がどうやって、物理的ではない心に作用を及ぼすのかを示してくれなければ問題の解決にならないのですが、そんなことができるわけではないのであって、現にデカルトもできていないわけです。しかし、これはデカルトが悪いというよりも、問題をこう立ててしまったら最後、絶対に解けないパズルみたいなものである可能性が高いのです。

脳と心——「並行論」と「即ちの関係」

そこで、哲学史の上ではその後、このデカルトの議論を何とか乗り越えようとして、いろいろな人がいろいろなことを試みました。そのうち一人だけ、スピノザという哲学者を挙げておきます。

彼は「並行論」ということを考えます。並行論というのは、「脳と心には直接の関係はない」ということです。関係を認めないというのは、ひとつの重要な洞察です。先ほど言いましたように、心と脳の間は何らかの「因果

関係「なり」「動機づけ関係」なりといった直接の関係が設定できると考えるから、おかしな話になるわけです。ですから、直接の関係はありえないとスピノザが認めたことは、大きな理論的進歩です。

しかし、そうすると次の難問が立ちはだかります。つまり、関係ないものが何でこんなにびったり同調して見えるのか。たとえば、私が怒ると血圧が上がるとか、脳内の特定の神経細胞が興奮してアドレナリンの分泌が促進されるということが、観察あるいは実験によって確かめられます。ですから、「こんなに見事にシンクロナイズしているものが無関係とはどういうことだ」という疑問に直面することになるわけです。

スピノザの「並行論」では、「直接の関係がない脳と心がびったり同調するのは、それらが神様というある唯一の実体のふたつの側面だからだ」と説明します。つまり、「同じものをこっちから見るのとあっちから見るのとで、見え方が違うから別々に見えるけれども、もとは同じなのだからシンクロナイズしているのは当たり前でしょう」という答え方です。これは、ある意味で、

きょう私が申し上げようとする答えに近いのですが、もちろん私は神様をもち出すわけではありませんので、ちよつと違う仕方で行きます。

いずれにしても、現在の脳科学をもってしても、心と脳の関係に関しては、デカルトに端を発して以来、スピノザあたりまでが考えに考えた議論と、理論的な状況はほとんど前進していないということを、ここで確認しておきたいと思えます。

スピノザの「並行論」は、さっきの思考実験で言えば、目の前のカードを「きょうはこれをめくるぞ」「いまはこれをめくるぞ」と考えた自分の心における決定の時刻と、そのときの脳の中の特定の状態は、一方が他方の原因とか結果ではなくて、まったく同時刻に起こるのだという方向を示唆する考え方です。これはかなり「ありそうだな」という気が皆さんもされるのではないでしょうか。

これに関連して、もう亡くなりましたが、戦後日本の哲学界をリードした大森莊蔵さんという方がいらっしやいます。大森さんも「まったく同時だろう」と考え

て、それを「共変関係」と名づけました。心の状態が何
か変化すると、それに伴って、まったく同時並行的に
脳の状態も変化する。心が脳の状態を惹き起こすので
もないし、その逆でもなくて、まったく同時に共に変
化する。その間に、何か因果関係があるわけではなくて、
あるのは共変関係、あるいは、同じ大森さんの言葉を
引用すれば、「即ちの関係」です。つまり、「私が怒って
いる。即ち、脳がこういう状態になっている」という関
係であって、どちらかがどちらかの原因であったり結
果であったりするわけではないということです。

2 生命理解の鍵概念——基づけと創発

さて、そこで話を先に進めます。大森さんの「共変関
係」「即ちの関係」とか、スピノザの「並行論」というのは、
ある観点から見れば、事がらのかなり正確な把握にな
っていると思えます。

そうだとすると、まったく違う心と脳、片方は大き
さも形もあるのに片方は大きさも形もないという、ふ
たつのものがびったりと並行しているということをし、

では、どう理解したらいいのか。並行しているとい
うことまではわかったとしても、どうして並行できるの
かが、なお不明なわけです。

脳と心は「基づけ関係」にある

そこで、この問題に立ち入るときにもち出してみた
いのが「基づけ関係」という考え方です。つまり、心と
脳の間には、「因果関係」でもなければ「動機づけ関係」で
もない、いままでわれわれがあまり知らなかった、あ
るいははっきり意識することがなかった新しい関係性
を見てとったかどうかという提案です。

「基づけ関係」は、もとはといえば、フッサールとい
う現象学の創始者が言及した概念です。フッサールは、
19世紀後半から20世紀初頭にドイツで活躍し、現象学
という学問を立ち上げた哲学者です。もともと数学者
から出発して、心理学、ついで論理学をやり、それか
ら哲学へと展開していった人です。彼の初期の大きな
著作に『論理学研究』という本がありますが、そこです
でに「論理学のひとつのカテゴリーとして『基づけ関係』
というものがある」という議論をしています。ただし、

フッサールの専売特許ではなくて、それに先立って、ドイツ・オーストリア学派という論理学の学派のアレクシウス・マイノンク (Alexius Meinong) という人がすでに述べていた概念です。

この「基づけ関係」は、ドイツ語で「Fundierung」という関係ですが、当時はさして注目を浴びることなく、いわば放ったらかされてきました。これに改めて注目したのが、戦後の1945年に出た、モーリス・メルロ＝ポンティというフランスの哲学者の『知覚の現象学』という本です。この本は、サルトルの『存在と無』と並んで、フッサールがドイツで展開した「現象学」を戦後のフランスで華々しく展開させる大きなきっかけになりました。

『知覚の現象学』の中で、メルロ＝ポンティは、論理学の一部分で用いられたのにすぎないフッサールの「基づけ」といういわばローカルな議論を大々的に取り上げて、一種の「存在論的な概念」に練り上げます。つまり、われわれの現実世界の中にいろいろなものが存在する、その存在の仕方に関わる根本的な論理として、「基づけ

関係」というものを取り上げ直したわけです。フランス語で「fondation」という言葉を使っています。「fond」は「地盤になるもの。もと」という意味で、「fonder」という「基づける」「地盤を与える」という動詞になります。そこから「fondation」という言葉が出てきます。

この関係のポイントは、「基づけるもの」と「基づけられるもの」というふたつの項が必ずあることです。このふたつが階層構造を成していて、「基づけるもの」は下にある。「基づけられるもの」はその上にあつて、この関係は逆転しない。上に行つたものが下に来るといふことはない。上に行つたものがさらにその上のものを支えるということがあります。いったん上下関係が定まれば、逆転するということはない。そういう階層構造です。

より詳しく見てみると、ここには「支える」と「包む」という関係があります。

「支える」というのは下のものが上のものを支える。つまり、「基づけるもの」が「基づけられるもの」を支えている。そして「基づけ構造」には、もうひとつ重要な

半面があつて、「包む」という関係です。今度は「上のものが下のものを包む」わけです。下のものが上のものを支え、そうやって支えられてでき上がった上のものは、実は下のものを包むのだということで、一種のループと循環が構成されます。上と下は一方的な関係ではなくて、つまり単に支えているだけとか、単に包んでいるだけというのではなくて、下が上を支え、上は下を包むという二重の関係になります。

これだけではまだ抽象的でよくわからないと思いますが、抽象ついでに、メルロ＝ポンティが『知覚の現象学』でそれをどう表現しているかを紹介しておきます。

「〔基づけるもの〕としてはたらく項は、〔基づけられるもの〕が〔基づけるもの〕の一規定ないし一顕在態として現われるという意味ではたしかに最初のものであり、このことは〔基づけられるもの〕による〔基づけるもの〕の吸収を不可能にしている所以であるが、しかし〔基づけるもの〕は経験的な意味で最初のものだというわけではなく、〔基づけられるもの〕を通してこそ〔基づけるもの〕

の〕が姿を現わす以上、〔基づけられるもの〕は〔基づけるもの〕の単なる派生態であるわけではないのである」〔第三部I・8、みすず書房版の邦訳に講演者が一部手を加えた）

これを読んで、何のことだか、すぐにわかった方は？ 多分、おられないでしょうね（笑）。ひとつひとつ順番に読み解いていかないとわかりません。

一々はいまやりませんが、ここで〔基づけるもの〕と言っているのを「下」と考え、〔基づけられるもの〕を「上」と考えて読み直すと、読みやすくなります。さらに、いまの文脈に即して、それぞれを「脳」と「心」に当てはめてみます。つまり、〔基づけるもの〕は脳あるいは身体。脳によつて支えられている〔基づけられるもの〕が心です。

心は脳によつて支えられている。ところが、単にそれだけかというところではなくて、支えられて上にある心に「包まれる」ことではじめて、下にある脳あるいは身体がそのようなものとして存在しているという関係です。

一方がなければ他方もない

「身体」とか「脳」とわれわれは簡単に言います。身体や脳が、われわれがそれを意識するしないに関係なく、それ自体で存在している——そう思っている場合が多いかもしれませんが。しかし、実はそうではないのだというのが、ここでのポイントです。つまり、何かがあるかとしてあると言えるということは、それが「何に、対して」そのように見え、そのようなものとして姿を現わしているのかということと切り離せないのです。

たとえば、われわれ人間であれば、頭蓋骨を開いて「これが脳だ」と言われれば、「ああ、そうか」と思うわけです。しかし、たとえば、いま地面を這い回っているアリのここへ呼んで来て、私の脳を見せたとします。そうすると、「これは脳であって肺ではない」とか「心臓ではない」というような区別をアリがするだろうかということです。アリにとつては、どちらも似たようなブヨブヨしたかたまりでしかないに違いありません。あるいは、自分が歩いている地面の延長のようなものかもしれない。

ですから、何かがあるかとしてあるというのは、ある特定の視点と相対的である。これが現象学の重要な洞察です。いまの例を逆のマクロのほうから見ると、たとえば地球がノミの頭ぐらいにしか見えないような巨人を想像してみてください。その巨人が、地球上の一人の人間の一部分である脳を見たとして、それを「脳」として認識するかどうか。おそらく、それこそノミもゴミもチリも区別がつかないでしょう。似たような、ごくごく小さな粒という程度であるはずです。

ですから、脳を見て、ほかのチリとは違う特定の器官であると言えるのは、アリの視点でもなく巨人の視点でもなく、人間的な視点であつてこそである。つまり、脳が脳として、心を支えている特定の身体器官として姿を現わすのは、あくまでもわれわれ人間の心にそれが現われるかぎりでしかないのです。これが、「心が脳を包む」という表現で言おうとしていることです。

これだけの前置きをして、さつき読んでわけのわからなかった『知覚の現象学』でメルロ＝ポンティが言おうとしていることを、脳と心の関係に置きかえて言い

「直すと、こうなります。」

「〔心的なもの〕は〔物(理)的なもの〕に支えられてはじめて存立しうる上位の秩序ないし次元であるが、〔心的なもの〕という上位の秩序の中ではじめて〔物(理)的なもの〕という下位の秩序ないし次元がそのようなものとして姿を現わすかぎりで、〔心的なもの〕は〔物(理)的なもの〕を包んでいる」

「こういうふうに表示し直すことができます。これが、「基づけ関係」のごくあらましです。下にある脳が上にある心を支え、上にある心が下にある脳を包むという特異な関係です。先ほど言いました循環関係を成すわけで、どちらか一方だけでは成り立たず、両方があるてはじめて成り立つ関係です。「支える」ということと「包む」ということの両方がないと、脳も心も成立しないわけです。」

「脳が心を支えている。これはそんなに違和感がないかと思えます。細かな議論は別にして、「たしかに、心といっても、脳がなくなってしまうたらなくなるだろうな」とだれでも思うでしょう。」

「けれども、脳があればいつでも心があるかという点、たとえば脳死とか植物状態のことを考えれば、第三者から見れば脳はなおそれなりに機能していても、少なくともご本人にとっては、もはや心は機能していません。つまり、何かを何かとして認識はしていません。無意識レベルでは別ですが。植物状態の場合は、生命を維持する最低限の機能はなお作動しているので、まったく心がないわけではないけれども、意識される部分はほとんど機能しなくなっていると考えられます。したがって、脳が心を支えているだけではなくて、脳が脳として姿を現わすのはあくまでも心に包まれることによつてだということも、たしかに言えそうです。」

「そのかぎりでは、多くの皆さんが「この表現なら、ある程度よろしい」と言ってくださるのではないかと思えます。」

「心の次元は、脳から「創発」した」

「そうすると次の問題は、そういう特異な関係、上と下との循環、ちょうどヘビが自分のしっぽをくわえているような形の循環関係がどのようにしてでき上がっ

たのかということになります。こういう「支え、かつ包む」という「基づけ関係」自体は、一体どのようにして成立したのでしょうか。

ここで「創発」という考え方を導入します。現在の生命科学の一部が非常に重視している考え方です。と言つても、必ずしも現代科学の中で十分に市民権を得たとは言えなくて、百家争鳴というか喧々諤々けんけんががくく、科学者たちが論争中の発想ですが、「創発」——英語で「emergence」、これを導入します。

「基づけ関係」には上と下の階層構造があると言いましたが、この関係を「創発」という考え方と結びつけて言い直すとこうなります。「基づけ関係における上の次元、上の秩序は、下の秩序から創発して（創発によって）成立した」。心と脳で言い換えれば、「心という次元は、脳という物理的なものの集合体から創発してできた新しい秩序だ」ということです。「創発」とは、事態のこのような捉え方です。

「創発」について、もうちょっとくわしく見ると、ピエル・ルイジ・ルイーシ(Pier Luigi Luisi)というイタリア

の生命学者が「創発する生命——化学的起源から構成的生物学へ」(NIT出版、2009)という本で、こんなふうに表現しています。(以下、ルイーシの引用はおおむね邦訳書の訳文に従ったが、文脈に応じて若干の補足や変更を講演者が加えた)

「より複雑性の低い下位の構成物が集合することによって、(かつ、そこに一定程度以上のエネルギーが供給されることによって)より高い複雑性が実現される際に生ずる、それまでには存在していなかった新しい性質の出現」と。

「この新しい性質の出現」を「emergence」と言うわけですが。もともと「出現」という意味ですが、いままでなかったものが、複雑性の程度が一段上がるときに突如として出現する、そんな現象が生命界にはたくさん見られます。それを「創発」と呼んでいます。

ちょっと結論を先取りして言っておけば、心というのは、そういう仕方での物理的なものの集合体から創発したものです。われわれの身体は、さまざまな物質がそこを行き交う交差点です。酸素や二酸化炭素が

ら始まって、水やデンブンや炭水化物、いろいろなものが集まっては出て行く集積点みたいなものが、われわれの体だと言ってもよいでしょう。身体というこの物理的なものの集合体が、ある段階に達すると、それまでの集合体には見られなかった新しい性質が突如、姿を現わす。そういうものとして、心をとらえてみてはどうか。

ただ、いきなりそう言うと、物質のかたまりの中に突如として幽霊か魂がバツと現われてきたような妙な印象をもたれるといけないので、少し丁寧に、実際に自然界に見られる創発の例を見てみます。

自然界の中の創発現象

たとえば、水というのはH₂Oで、水素と酸素がくっついてできたものです。ここにも実は「創発」があるのです。水素には水素に固有の性質があります。酸素には酸素に固有の性質がありますが、それらが特定の割合でくっついたときに、「水」といういままではなかった性質が突如、現われます。つまり、水というのは、水素だけでは予想もできなかったし酸素だけでは存在

していなかった性質が、特定の割合でそれらが集合したときのみ出現する特定の分子状態です。

ただし、これは生命現象ではありませんから、厳密にいうと「創発」と呼ぶには異論のある人もいますが、ここでは広い意味で言っていると考えてください。

「水」について、さらにその先を見ていくと、水分子の集合体にエネルギーが供給される。あるいは、水分子自体がそのエネルギーをもっている。そのエネルギー状態が温度にして零度以下だと、水は「固体」つまり水です。ところが、エネルギーの供給が高まり、分子運動が激しくなってきたり零度を超えると、水は「液体」に変わります。これは、かなり劇的な変化です。固体というあり方をしていたものが流動体に変わってしまうわけですから、これも新しい性質の出現のひとつととらえることができます。

さらに熱エネルギーが供給されていくと、水は独特の循環運動を始めます。小学生のころにやったと思いますが、ピーカーの下から熱を当てていって、ある段

階まで熱くなると、下から上へ、上から下へと、きれいな円環運動が姿を現わします。「対流」ですね。固体から液体になるほど劇的ではないかもしれませんが、いままでなかった振る舞いを水分子がするという意味では、これも広い意味での創発のひとつです。

さらにエネルギーの供給を高め、温度を上げると、沸点に達します。水でいうと100度です。今度もまた劇的に、液体から「気体」へと存在の仕方が変わります。いままででは流動体だったものが、空中にバースッと拡散していつてしまうわけですから、これもひとつの創発です。つまり、集合体へのエネルギー供給が一定の限度を超えると、急に違う性質が現われるのです。

次の例は植物です。酸素分子と二酸化炭素分子の集合体があります。大気の中には、この両方が含まれています。ただ含まれているというだけ、ただ含まれているというだけのランダムな並存状態です。しかし、そこに光エネルギーを媒介にして光合成が生じます。光合成というのは、炭素を取り込んで酸素を放出するという一連の化学的過程ですね。この取り込んだ炭水化物によって

我が身を養うのが植物的な存在です。このとき、酸素はいらないから吐き出されます。こうして植物という新しい存在が出現する。

いままでは酸素と二酸化炭素がただ混じっているだけだったのが、それらが植物的秩序の中に取り込まれると、特定の物質循環に姿を変えるわけです。つまり、あるものに取り込まれて吐き出されるという物質の循環過程、先ほどの水の対流みたいなものです。大気中では起こっていなかった酸素と二酸化炭素の特定の流れが起き上がります。

この話には、まだ先があります。今度は、吐き出されて空気中に以前よりたくさん含まれるようになった酸素を取り込んで、それを燃やす、つまり酸化させることで自分の運動エネルギーを得る、われわれのような動物的存在が出現します。そして二酸化炭素を排出する。動物は植物とは逆の物質摂取と排泄の過程をとるわけです。これも、創発の一例です。

生命の誕生——存在論的革命

このように「創発」という現象は、自然界のいろいろ

なところで見られるわけです。きょうのテーマである生命に関して言うと、自然界には大きくいって「無機物」と「有機物」がありますが、まず無機物のレベルでも、さまざまな創発関係が見てとれます。

たとえば、「素粒子」が集まって「原子」になる。原子の中には原子核と電子があつて、原子核は陽子と中性子から成ります。素粒子だけでは現われなかつた特有の構造化がそこで生じている。原子という固有の性質をもつた秩序が成立しています。さらに、原子がいくつか特有の仕方で結びつくと「分子」となり、原子のときには見られなかつた独特の振る舞いをするようになります。分子がたくさん集まると「高分子」というわけですが、これらはいずれもまだ無機物です。生命とは普通は考えない。

ところが、この無機物の中に植物的秩序のようなものが出現すると、ここで何か大きな変化が起きます。普通ここに生命の誕生を見るわけです。

そうすると生命の中身は何かという話をしなければいけません、それに関して「存在論的革命」という言

葉を引こうと思います。ハンス・ヨーンナス (Hans Jonas) というユダヤ人の哲学者で、ユダヤ人であるがゆえにイギリスに亡命し、最終的にはアメリカで亡くなった人の言葉です。『責任という原理』という著作で、現代の生命倫理学にも大きな影響を与えた人物です。

彼は『生命という原理』という本も書いています。(邦訳『生命の哲学』法政大学出版局、2008)

その中で彼が使っている言葉が「存在論的革命」です。何が革命かというと、無機物と有機体との間には創発関係が認められるけれども、それは並たいていの創発ではない。というのも、創発は有機体の中でもさまざま段階で見られるし、無機物の中でもいろいろな段階で見られる。けれども、無機物と有機物をまたぐ段階で出現するまったく新たに画期的な性質が、実は「生命」であるわけですから、これは一種の革命にも似たとつてもない出来事が起こつたのだというわけです。

ヨーンナスはこう言います。「有機体の体系(システム)は、実体に基づくのではなく力学的機能に基づいて(あるいは、質料ではなく形相に基づいて)自分自身を同一のもの

のとして保持する「したがって〔有機体において〕体系を定義する属性は配列(構造)ではなく、動的な振る舞い(過程)である」

つまり、ここで創発によって生じたのは、標語的にいえば、「モノ」から「コト」への大転換です。実体というのは「モノ」で、「モノ」というのは普通死んでいると考えられています。いわゆる物質が死んでいるという意味です。死んでいるといっても、素粒子などはあつという間に消滅してまた新しいものが生まれてくるのだから、これを死んでいるといっているのかどうかは別に考える余地があるかもしれませんが、常識に従って、普通「素粒子が生きている」とは言わないから「死んでいる」と言っておきます。こうしたことを全部含めて、実体という秩序に属しているのが無機物だとすると、有機体が発現することで、実体に基づくのではなくて力学的機能ないし働きという「コト」に基づいて、しかも自分自身をつねに同一のものとして保持するような機能が生じている。

物質ではない「自己」の出現

生命の大きな特徴のひとつは「自己」をもっていることです。何らかのかたちで保持するべき自己というものをもっていて、しかも変化の中でそれを同一に保とうとする。あくまでも、運動の中で同一性を保ちます。皆さんの体もそうです。時間の流れの中で、空気を吸い、二酸化炭素を出し、のどが渴けば水を飲み、ご飯を食べ、排泄をするという仕方、絶えず物質は流動しているわけです。中へ入っては外へ出て、外にあつたものの中へ入ってくる。絶えずその流動の中にあり、それによって不思議なことに身体はいつでも同じ身体です。もちろん、時間の中で刻々と年老いていくという変化はあるにしても、同じ「私」の身体であるわけです。

ここで同一に保持されているものは何なのか。物質的には全部入れかわっていきます。物質のレベルでは、よく言われるように、十年もすれば、われわれの身体はすみからすみまで違うものになってしまいます。新陳代謝によって、まったく新しい物質に置き換わっているのに、「十年たったから、『私』は『私』でなくなった」

とは言わないわけで、ずっと同じ「私」の身体が存続しています。そうすると、ここで存続しているものの同一性を担保しているのは物質ではないことになります。「そうではなくて、それこそ「私」「自己」とでもいうべき、ここでのヨーナスの言葉を使えば「形相」的なもの、つまり概念的なもの、理念的なものです。

この、物質のレベルでは説明のつかない「自己」という概念的ないし理念的なものの出現が、生命の出現に等しいわけです。ここまで言えば、多くの人は「ははん」と思われたと思います。この理念的なもの、「自己」というかたちで、物質の絶えざる変化にもかかわらず同じものとして維持され続けているものは、われわれの「心」の領域と、きわめて似たあり方をしているのです。つまり、「自己」というのは概念であって、それ自体が目に見えるものではない。物質のように姿や形をもっているものではない。物質であれば、先ほども言いましたように、十年も立てば、きれいさっぱり昔のものではなくなっているわけです。それでも「同じ『私』です」と言っ、だれもあやしまないときの、その同じさは

何が保証しているかということ、概念的な同一性です。つまり、ちよつとはしよって言ってしまえば、「心」のレベルにおける理念的なものの同一性です。

ですから、この線で行くと、原初的な「生命」つまり植物的生命が誕生したときに、すでに「心」も誕生したと言っ、いいことになります。これは、少なくともヨーロッパの常識的観念から見るとんでもない話ですが、しかしヨーナスは、大まじめでそうした主張をしています。つまり、心が人間にしかないというのは一種の偏見だ、あるいは人間の思い上がりだと言っ、います。

動物は、言うまでもなく心をもつし、植物だって実は心をもつ。ただ、その植物的心は、われわれで言えは無意識レベルで動いている心です。さつき植物状態の話をしました、この状態では、意識が機能していません。でも、きちんと生体は機能して、生きています。そのときの心の働きが、ちよつと植物において心が働いているのに似ていると言っ、そうなのです。それは明確な自覚的意識ではないけれども、きちんと

「自己を自己」として保持するように機能している」という意味では「心」です。物質ではなく、物質の交換過程を規整ないし支配する原理が「心」なのです。そういうふうにヨナナスは事態を捉えて、これを「存在論的革命」と呼びます。

3 生命と知 あるいは「現象すること」

最後に「生命と知 あるいは『現象すること』」というお話をします。

ここまでのところで、「生命」という秩序にようやく話が移ったわけですが、生命をとらえるときに、大きくふたつのメルクマール(指標)を考えたいいのではないか。つまり「生命とは何か」と言ったときに、これから述べるふたつを押さえておけば、それを生命と言っている。逆にいうと、そのうちのひとつだけだと、まだ生命とは言えないということです。

生命の指標① オートポイエーシス

1 番目が、「オートポイエーシス (autopoiesis)」です。現代のある種の生命学者たちが言い出したことで、

まだ市民権を得た言葉とは言えませんが、ギリシャ語で「オート」は「自己」、「ポイエーシス」は「製作」ですから、「自己を製作する」という意味になります。いま見てきたように、生命は自己をもっています。必ず保持するべき、流動や変化を通じて同一なものとして維持するべき自己をもっています。「自己保存本能」とよく言いますが、これは生命の最も基本的な本能で、自己が失われようとするのに激しく抵抗するのが生命の本能です。だれでも、自分が殺されようとするれば何が何でも阻止しようとします。本能中の本能です。その中核にあるのが「自己」であり、「自己」が失われることを回避しようとする動向です。「自己」を何とかして維持しようとするのが生存本能ですから、そこにはすでに「自己」が姿を現わしていなければならないのです。

オートポイエーシスというのは、そうした「自己を製作する」。つまり、自分で自分をつくるということです。これを先ほどふれたルイーダが、定義風の言い方で表現しています。「物質的・エネルギー的には開かれ、絶えず物質の流出入が起こっているが、自らの機能的維

持については閉じた(作動的閉包 operational closure)系」と。

われわれは空気を吸い、水を飲み、絶えず外から物質を入れては、吐き出すということをやっています。絶えず物質の流入が行なわれて、エネルギー的には開かれています。絶えず、そこには流動があります。しかし、物のレベルでは絶えざる流動があっても、その中心には吸ったり吐いたりする「自己」がつねにいるわけです。吸ったり吐いたりする働き、私は「中心化の働き」と呼んでいます。その「中心化の働き」の核になるものがなければ、物質のそういう流動は起こらないわけです。だから、その核にある部分が変わらない、変化しない。これが「自己」です。物質レベルで開かれているのに対して、「自己」は機能的には閉じている。これを「作動的閉包」と呼んでいます。

この「閉じている」ということについて、ちょっと連想を働かせてほしいのですが、先ほどの「基づけ関係」は、一方で支え、他方で包む関係だと言いました。この「包む」ということのなかに、「作動的閉包」という事態も反響していると考えてください。「閉じている」と

いう意味は、物質は絶えず新たなものに入れ替わりますが、その過程自体は円環を成している。サークルを成しているのです。そこには絶えず新しいエネルギーが必要であり、供給されたエネルギーのもとで、物質的には新しくなるわけですが、機能的にはいつもひとつの中心に向かって閉じている。その閉じている一連の動きの中に、すべての物質が入り込んでいくわけです。酸素や二酸化炭素も入り込めば、タンパク質も入り込む。水も入り込む。脳もまた当然、こういう循環の中で形成された物理(質)的なものなのです。

こういうかたちで、「自己」を産出するシステム」が自然界に登場したときに、生命への第一歩が始まったのです。

自己と環境——互いに互いを作り出す

その特徴を、もうひとつ引用で確認しておきます。ルイージの言葉ですが、「ここで創発は、対象(外)環境と(対象を)観測する意識(内)自己」との間で生じている共・創発となる」。

生命は「自己」というものをつくり、必ず「自己」をも

っています。そして「自己」でいるためには、同時に「外」がなければならぬ。それが「環境」です。生命体は、それだけで存在することはありえず、環境との間で物質の出し入れをしなければ生きていけません。自己という「内」と、自己を取り巻く相対的な「外部」である環境をもっている。内と外といっても、それぞれが他方に対して全面的に閉じているのではなくて、相対的に閉じているにすぎません。絶対的な断絶ではなくて、内包と排出というか、内へ取り込み、外へ吐き出すという関係ですね。

自己と環境の間には絶えず相互作用があります。この相互作用の中で自己も環境も長い目で見ると少しずつ変わって行って、新しいものがそこで出現してきます。これは進化とも関係がありますが、新たなものが「創発」してきます。

このような事態を、「互いの存在を相互に作り出すような過程であるイナクシオン (anaction)」と表現した人がいます。オートポイエーシス理論の提唱者の一人であるフランシスコ・ヴァレラ (Francisco Varela) です。この

ヴァレラとウンベルト・マトウラーナ (Humberto Maturana) というチリの2人の科学者が『オートポイエーシス』という本を出して、一躍この理論が注目されるようになりました。「邦訳『オートポイエーシス—生命システムとはなにか』国文社、1991」

イナクシオン (相互的創発とも訳しましょうか) の典型的な例は、いま皆さんが吸っている空気です。「私たちが呼吸する大気は、生物が存在する以前には地球上に存在しなかった」と、リチャード・レウオンティン (Richard Lewontin) という学者が言っています。

どういうことかというところ、植物的秩序が地球上で成立したときに何が起こったか。それは大気の豊酸素化でした。植物が光合成を始めたので、酸素がどんどん大気中に排出され、炭素のほうは逆に取り込まれて行って、炭水化物として植物の体になります。こういうかたちで大気の組成自体が変化する。つまり、生命が環境をも新たに作り出したわけです。

そうすると今度は、この豊酸素化した大気があることではじめて成立できる私たちのような動物的存在が、

そこに出現した。新しい「内(自己)」が「外(環境)」から生み出されたのです。

しかも、動物的存在は突如として出てくるのではなくて、実は植物的な秩序に「支えられて」います。ここにも「基づけ関係」があるわけです。

植物状態の話をまた引き合いに出しますが、われわれの生体維持機能の多くは、ある意味で植物的なレベルでまかなわれています。だからこそ「植物状態」という言い方が意味をなすのであって、つまり呼吸や血液循環はことさらに意識しなくても、つつがなく進行します。心の「無意識のレベル」で何らかの「自己」がすでに認知されていて、その維持すべき自己を保持するためにには呼吸しなければいけない、心臓を動かして血液を循環させなければいけないということが無意識の内に行なわれているわけです。ですから、われわれ動物は植物とまったく別の存在というのではなくて、自身の中に植物的秩序を「包んで」います。その秩序に「支えられ」、その上に乗っかっている秩序ないし次元があつて、それが普通、精神と呼ばれたり、意識的な

心の活動とされたりするわけです。

生命の指標② 代謝と認知

そこで、生命にとつてもうひとつなくてはならないものが「代謝と認知」です。

「代謝」というのは物質交代のことで、呼吸をして酸素を取り込み二酸化炭素を排出するとか、植物なら逆に炭素を取り込み酸素を排出する。こういう代謝が生物にとつては不可欠です。そのためには、生物は自分の中に取り込むべきものとそうでないものを、どこかで識別していなければいけません。何でも取り込んでしまつたら、有害なものまで取り込んで死んでしまいますから。この識別が「認知」です。広い意味での「知」ということになります。

ルイージは、こう書いています。

「代謝は環境との相互作用によつて進行する、生物学的な認知現象である。すでに存在する代謝ネットワークは外部環境に存在する分子を認識し、それをネットワークの一部として取り込む」

たとえば、呼吸をすることで酸素を取り込み二酸化

炭素を排出するというのは立派な認知現象なのです。酸素を「取り込むべきもの」としてとらえ、二酸化炭素を「排出するべきもの」としてとらえなければ呼吸は成り立たないのですから、これは認知現象だというわけです。きちんと見分けている。これが生命にとって必須の一過程である「認知」です。

「生命という過程に至るためには、最も単純な形であれ、認知という要素が必要となる。オートポイエーシスと認知の組み合わせが、生命を構成するための最小限の要求なのである」とも書いています。

なぜ両者の組み合わせが必要なのかという点、オートポイエーシスというのは「自己をつくる」ことです。『生命であるためには『自己』というものがなければならぬ』と先ほど言いましたが、しかし、「自己をつくる」だけでは「生命」とは言えないケースが存在するからです。たしかに「自己再生産」が見られるけれども、そこには「認知」が認められず、生命とは言えないという場合があります。

ちよつと専門的な話になりますが、小胞とかミセル

(micelle)と呼ばれる存在があります。たとえば、洗剤などの界面活性剤(分子内に、水になじみやすい部分と、油になじみやすい部分をもつ物質)が、ある濃度以上になると、普通の顕微鏡では見えないけれども実は粒ができている、これは分子状態としてはかなり巨大な分子です。それをミセルというのだそうですが、これが自己増殖をします。まあ増殖と云っていいかどうか分かりませんが、分解してまた自分と同じようなものをつくる。けれども、そこに、さっき言ったような「認知」とか「自己」といったものがあるかという点、かなりあやしいと言わざるをえない。

そういうボーダーラインケースがあるので、彼ら生命学者、特にここで話しているルイーダという学者などは、単にオートポイエーシスという自己再生産だけでは生命の定義としては不十分であり、「認知」という構造が成立している必要があると主張するのです。

「かたちの出現」と「生命の成立」

最後のまとめになります。

講演タイトルに「現象学」と入れてありますが、私は

この「認知」ということを「現象する」とことと、広くとらえ直してみたらどうかと考えています。

「現象する」とは、別の言い方をすると「かたちの出現」です。何らかのかたちをもったものだけが現象することが出来る。つまり、何かが何かとして姿を現わすためには、その「何かとして」という「として」の部分が必要で、この「として」に当たるのが「かたち」、すなわち他と区別された、当のものに固有の輪郭です。その意味で、「世界の現前」イコール「現象すること」と言えると思います。

しかも、「現象する」とは、二重の意味での「かたちの出現」なのです。「二重の意味で」というのは、ちよつとややこしい表現になりますが『かたち』であり／『かたち』を受けとる能力としての『心』です。

説明しますと、まず「かたちである」というのは、われわれ生命体は、植物のレベルからしてすでに「自己」を環境と区別しています。つまり、自己を自己としてとらえているわけです。しかし、それはわれわれの明確な意識とはちよつと違う状態で、植物ですらそれを

認知しているような意味での自己です。それでも、きちんと「自己の内に何かを取り込み・何かを排出する」という仕方、自己を知っているわけです。これは、ヨナナスが「形相」と呼んだような意味での自己です。つまり、自分自身がそれであるような自己が、すでに「かたち」を備えて成立している。あるいは、出現している。この意味がひとつあります。

もうひとつの『かたち』を受けとる能力としての『心』は、もつとわかりやすいものです。たとえば植物であれば、炭素は取り込むべきもの。吐き出すべきものは酸素です。というように、取り込むべきものと吐き出すべきものを、きちんと見分けることができるという事は、それらが「かたち」をもっているから。認識できるということは、輪郭をもっていて、他と区別できるということです。この、他と当のものを区別する輪郭が「かたち」です。

つまり、自分の側に「自己」としてある「かたち」と、自分の前に、あるいは外に、自分の内に取り込むべきものと排出するべきものとしてある「かたち」。この二

重の意味で「かたち」が姿を現わすこと、これを「現象すること」と呼んでみたらどうかと、私は提案します。この二重の意味で現象することをもって、生命という新しい秩序が成立したと考えるみようというわけです。

われわれには「内面性」とか「内的自己同一性」という、自己としてのかたちがあります。他方、自分の外部にあつて取り入れたり吐き出したりするべきものも、かたちを備え、自己に対して姿を現わしています。「自己」と「環境」です。そして、われわれは対象あるいは環境を受けとる、あるいは認知することによつて、自己自身を感じているとも言いますか、対象を認知することによつて、それを取り込んだり排出したりする当のものとして、自分自身をも何らかの意味で知っているわけです。この「何らかの意味での」知っているを、いま「感じてある」と言いかえてみました。なぜかというところ、この意味での「認知」は、普通の意味での認識ではないからです。こうした二重の意味での「自己」の成立とその「認知」という構造の成立が生命ではないかと考えます。

脳と心——生命という統一体の裏表

そこで最後に、きょうの本題に戻ります。

いまのような生命のとらえ方をしたときに、脳と心の関係について、「脳(身体)と心は同じひとつの事態の表裏であり、その同じ事態とは『生命』である」と、こんなふうに言っているのではないでしょうか。別の言い方をすると、「脳と心は生命の一段階を画する同じもの。つまり一つの統一体の裏表なのだ」と言ってもいいかと思えます。

なぜそういう言い方をするかはもうわかりだと思えます。生命にはいろいろな段階があつて、植物的段階もあれば動物の段階もある。動物的段階といつても、非常に下等な、まだ脳と呼ぶべきものをもっていないような、脳と他の器官が区別できないような動物的段階もあります。そのような段階から、脳が脳としてはっきり機能分化して、とりわけ重要な機能を演じるようになる段階へと動物的生命は移行した。そのときそこには、その脳と心をひとつの統一体として統合しているような、つまり「基づけ関係」によって両方を「支え、

包む」というかたちで統合しているような、新しい秩序が出現しているのです。

一方に、「基づけるものとしての質料」すなわち「脳を含む身体プラス環境」としての物理的なものがありま
す。他方に、「基づけられたものとしての形相」すなわち(認知された)「自己」とその外部(環境)としての心的なものがあります。それらの統一体は「生命」という原理、「生命」という秩序のもとで成立した。こんなふうに見えるのではないかと思います。

ですから、脳と心というのは、事がらの一側面をこ
とさらに切り離して取り出したとき、何か別々のものに思えるけれども、実際には切り離すことができなく
て、心なしでは脳は脳たりえないし、脳なしでは心は心たりえない。だから、そもそも切り離すことができ
ないかたちで、ひとつの統一体を形成している。

その統一体に、スピノザのように「神」という名前を
与えるのは、現代日本の普通の人にははばかられるか
ら、もうちょっと現代風の名前を与えるならば、それ
は「生命」で十分に通じるのではないか。

したがって、生命の特定の段階において、「脳」と「心」というふたつの側面が、いわば一つの統一体を構成するようになっていく。そんなふうを考えてみてはどうかという提案を、きょうはしてみたわけです。

(さいとう よしみち／慶應義塾大学教授)

(2010年10月15日、東京新宿区の日本青年館で行われた講演に加筆していただいたものです)